モーパッサンの幻想短編小説 (一)

野　浪　嗣　生

モーパッサンの短編小説のテーマには実にさまざまなものがあり，例えば子供を扱ったもの，犯罪・変死・殺人などを扱ったもの，情事・姦通を扱ったもの，娼婦を扱ったもの，金銭問題を扱ったもの，農民を扱ったもの等々ヴァラエティに富んでいるが，その中に発狂・恐怖・幻覚を扱ったいわゆる幻想物・怪奇物に属する一連の作品群がある。ナチュラリストであるモーパッサンの作品としては異色のものと言えようが，「彼の短い一生は，狂気の幻覚や不安が次第に激しさを増していく一生であり，彼はその強迫観念におびえながらも，最後まで作家としての観察眼を曇らすことなく，これを作品のなかに描き出したのである。つまり，彼の短編は晩年に近づけば近づくほど，病気の作者の自己観察といった趣きをおびてくる。いわば一種の証言の文学であり，その観察がまことに明晰かつ綿密であればあるだけ，読む者にとっては，鬼気迫るものを感じないわけには行かないのである。[1)]」と澁澤龍彦氏が述べているように，モーパッサンの宿痾の症候としても再々取り上げられ，論じられている作品群でもある。しかし，1875年に発表された処女短編 *La main d'écorché* がこのテーマを持つことでも分かるように，モーパッサンにはもともとこの種のテーマへの関心があったのである。そこで本稿ではこの種の作品に焦点を絞り，その構成を調べてみようとおもう。

I

「幻想的という言葉は決して定義し易い言葉ではない。幻想的（fantas-

1）澁澤龍彦「フランス怪奇小説の系譜」『ビブリオテカ澁澤龍彦Ⅳ』（白水社，1980年）所収　p. 346

tique）の同族の語として，fantaisie, fantasque（phantasque），fantasmagorie, fantôme などの言葉が浮かぶが，これらの単語の意味を厳密に区別するのは，極めて難かしいことのように思われる。しかも，これらの言葉のかたわらに，幻想的なものとごく近い関係にある「夢幻的」（féerique）とか「驚異的」（merveilleux）といった言葉を置くならば，幻想的ということの意味はますます複雑を極め，その定義づけはいっそう困難となるにちがいない。[2)]」と窪田般彌氏が述べているように，幻想なるものはこれまでに多くの批評家や研究者たちが定義づけようと努力してきたにもかかわらず，いまだに誰も明確な定義には成功していない。窪田氏は先の文章にすぐ続けてルイ・ヴァックスの『幻想の美学』（*L'Art et la littérature fantastiques*）からの言葉を引用している。「幻想的ということを敢えて定義づけるようなことは止めにしておこう。（…）むしろ，夢幻的とか，詩的とか，悲劇的といった隣接領域との関係を明らかにして，幻想的なるものの領域を劃定することにしよう。[3)]」また，先の澁澤龍彦氏は『幻想文学について』という小論の中で，ロジェ・カイヨワ，ピエール・カステックス，アンリ・パリゾ，ルイ・ヴァックス，フランツ・エラン，ピエール＝マクシム・シュール，マルセル・シュネデール，ミシェル・ギヨマール，クロード・ロワ，マルセル・ブリヨンなどの「それぞれ幻想芸術ないし幻想文学を主題として扱った，めぼしいフランス語の論文を片っぱしから読み返してみたのであるが，驚いたことに，ファンタスティックという言葉に対する定義は，論者によってかなり違っていた。[4)]」と述べている。結局のところ「これまでのところ，一理論をもって幻想的な物語の多様性を包摂した例はない。いかに巧緻でも，単一の理論で幻想

2） 窪田般彌「フランス幻想小説」『幻想の海辺』（河出書房新社，1972年）所収 p. 123

3） 同上

4） 澁澤龍彦「幻想文学について」『ビブリオテカ澁澤龍彦Ⅰ』（白水社，1979年）所収　pp. 332〜3

文学をすくいとるのは困難であり，網で水を扱むようなものだ。[5]」ということになろうか。ともあれモーパッサンの幻想物語は一体どのようなものであるのか，まずモーパッサン自身のクロニック *Le fantastique* (1883) を手掛かりとして考察に入っていきたい。

このクロニックの中で，モーパッサンは次のように言っている：

Lentement, depuis vingt ans, le surnaturel est sorti de nos âmes. Il s'est évaporé comme s'évapore un parfum quand la bouteille est débouchée. En portant l'orifice aux narines et en aspirant longtemps, longtemps, on retrouve à peine une vague senteur. C'est fini.

Nos petits-enfants s'étonneront des croyances naïves de leurs pères à des choses si ridicules et si invraisemblables. Ils ne sauront jamais ce qu'était autrefois, la nuit, la peur du mystérieux, la peur du surnaturel. (...) Nous avons rejeté le mystérieux qui n'est plus pour nous que l'inexploré.[6]

すでに1881年のクロニック *Adieu mystères* の中にも同趣旨の文言が見られるが，この言葉はまた短編 *La peur* (1884) の次の言葉を思い起こさせる：

On se dit:《Plus de fantastique, plus de croyances étranges, tout l'inexpliqué est explicable. Le surnaturel baisse comme un lac qu'un canal épuise; la science, de jour en jour, recule les limites du merveilleux.》[7]

この言葉は作中人物である老人のものであるが，クロニックの文章と照

---

5) Franz Rottensteiner: *The Fantasy book* 邦訳『ファンタジー〔幻想文学館〕』村田薫訳（創林社，1979年）p. 24

6) Gérard Delaisement: *Maupassant journaliste et chroniqueur*, Albin Michel. 1956. pp. 235～6

7) *Maupassant Contes et nouvelles, tome I*, Bibliothèque de la Pléiade, 1974. p. 199. 以下 Pléiade I と略

らし合わせてみればモーパッサン自身の考えであることは明白であろう。とまれ，状況がこのようである以上，次の結論が導かれるのは必然でもあろうか：

De là va certainement résulter la fin de la littérature fantastique.[8)]

また，幻想小説作家については次のように述べている：

Quand l'homme croyait sans hésitation, les écrivains fantastiques ne prenaient point de précautions pour dérouler leurs surprenantes histoires. Ils entraient, du premier coup, dans l'impossible et y demeuraient, variant à l'infini les combinaisons invraisemblables, les apparitions, toutes les ruses effrayantes pour enfanter l'épouvante.

Mais, quand le doute eut pénétré enfin dans les esprits, l'art est devenu plus subtil. L'écrivain a cherché les nuances, a rôdé autour du surnaturel plutôt que d'y pénétrer. Il a trouvé des effets terribles en demeurant sur la limite du possible, en jetant les âmes dans l'hésitation, dans l'effarement.[9)]

そして優れた作家としてホフマンとエドガー・ポーの名を上げているが，同時に第一級の幻想物語作家としてイワン・ツルゲーネフの名も上げ，《faire passer des frissons dans les veines》[10)]である彼の作品について次のように言っている：

Dans son œuvre pourtant, le surnaturel demeure toujours si vague, si enveloppé qu'on ose à peine dire qu'il ait voulu l'y mettre. Il raconte plutôt ce qu'il a éprouvé, comme il l'a éprouvé, en laissant deviner le trouble de son âme, son angoisse

---

8) Gérard Delaisement: *op. cit.*, p. 236

9) *ibid.*, pp. 236～7

10) *ibid.*, p. 238

devant ce qu'elle ne comprenait pas, et cette poignante sensation de la peur inexplicable qui passe, comme un souffle inconnu parti d'un autre monde.[11)]

このクロニックに限らず，モーパッサンにはツルゲーネフについての言及が再々見られるが，先に引用した *La peur* の中でもやはりツルゲーネフのことが述べられ，このクロニックと同様の事柄，つまりツルゲーネフがいかに優れて第一級の幻想小説作家であるかがさらに詳しく語られている。そして，ツルゲーネフが《On n'a vraiment peur que de ce qu'on ne comprend point.》[12)]と言ってから物語った話を紹介している（因みにこの言葉は短編の作中人物である老人によっても3度繰り返して言われている）。ツルゲーネフの話とは次のようなものである。若い時，一日猟をしていて夕方清流を見つけ，彼はその川で泳ぎたくなってさっそく服を脱ぎ，水に入って気持ち良く泳いでいた。突然肩に手を掛けられてびっくりして振り向くと，自分をじっと見つめている恐ろしい生き物が目に人った：

Cela ressemblait à une femme ou à une genon. Elle avait une figure énorme, plissée, grimaçante et qui riait. Deux choses innomables, deux mamelles sans doute, flottaient devant elle, et des cheveux démesurés, mêlés, roussis par le soleil, entouraient son visage et flottaient sur son dos.[13)]

彼は恐怖に襲われる：

Tourgueneff se sentit traversé par la peur hideuse, la peur glaciale des choses surnaturelles.[14)]

そして無我夢中で泳いで岸にたどりつき，服や鉄砲のことなど思い浮かぶべくもなく森へと跳んで逃げるが，恐ろしい生き物は彼を追いかけてく

11） *ibid.*

12） Pléiade I, p. 201

13） *ibid.*

14） *ibid.*

る。もう駄目だと思った時，近くで山羊の番をしていた少年が手にした鞭でその生き物を追い払ってくれた。あとで分かったところによるとその生き物は30年以上もその森に住む狂女であった，というものである。

《Je n'ai jamais eu si peur de ma vie, parce que je n'ai pas compris ce que pouvait être monstre.》[15)]

と言って話を締めくくるのであるが，ツルゲーネフ自身が恐ろしい生き物を目にした瞬間 la peur glaciale des choses surnarturelles を感じたとしても，果たして読者が同じ恐怖を抱くであろうか。もっともこの挿話は，理解できないものだけが恐怖であるということを納得してもらうための単なる例でしかないといえばそれだけのことであるが。ただ，この話を技巧を凝らして作品に仕立て上げても，おそらく神秘的・幻想的なものにはならないのではなかろうか。もちろん幻想と恐怖とはほとんど不可分であるけれども（先に引用したクロニックの中で，恐怖を生み出すために pour enfanter l'épouvante 幻想小説家は不可能の中へと入っていく，と述べている）恐怖イコール幻想というわけではない。「絶対であるはずの理法が崩壊するとき，幻想の素地が露顕する。生と死，生命あるものと生命なきもの，自我と世界等の領域に幻想は受胎する。現実が非現実へと変貌を遂げ，堅固な実体が幻影・夢幻・幻覚にすりかわるときに，幻想は創り出される[16)]」とすれば，ツルゲーネフの話はこの要件を欠いているし，「外在する，未知の作用力が喚起する畏怖，喉首を締めあげる名状しがたい畏怖一の醸し出す雰囲気がぜひとも必要だ。かつまた，主題になじむような危機感・不安感を伴ったある種の暗示がなくてはならない。この暗示とは，人間の思惟をうがつ最も恐るべき観念，換言すれば，≪自然≫をつかさどる理法の，邪悪にして特殊な宙吊り状態もしくは失墜という観念の暗示である[17)]」という雰囲気や暗示を欠いているのである。また，結末で

15） *ibid.*, p. 202

16） Franz Rottensteiner: *op. cit.*, p. 17

17） H. P. Lovecraft: Rottensteiner の引用による. *ibid.*, p. 18

は合理的な解決がなされている。つまり，くだんの恐ろしい生き物が狂女であると分かった時点で恐怖は消滅してしまう。結局この挿話は幻想物とは言えないのである。モーパッサンにも，結末で合理的解決がなされた，もしくは語り手がそれを試みようとする作品が数編あるが，上述のツルゲーネフのものとは少しく趣を異にしている。この種の作品を以下に見てみよう。

II

いわばツルゲーネフ流の作品には，先の *La peur* の中のもうひとつの挿話もそうであるが，*Auprès d'un mort*, *Le tic* がそれにあたるだろう。どちらの作品も，作者自身とおぼしい「わたし」によって語り手が紹介されている。つまり枠組みを持つ作品なのだが，その枠組みで語り手はかなり詳細に描かれる：

Il s'en allait mourant, comme meurent les poitrinaires. (...) puis il croisait, d'un mouvement très lent, ses longues jambes, si maigres qu'elles semblaient deux os, autour desquels flattait le drap du pantalon, (...)

Alors il ne remuait plus, il lisait, il lisait de l'œil et de la pensée; tout son pauvre corps expirant semblait lire, toute son âme s'enfonçait, se perdait, disparaissait dans ce livre jusqu'à l'heure où l'air rafraîchi le faisait un peu tousser. (...)

C'était un grand Allemand à barbe blonde, qui déjeunait et dînait dans sa chambre, et ne parlait à personne.[18] (*Auprès d'un mort*)

Il n'en vint que deux, mais très étranges, un homme et une femme: le père et la fille. Ils me firent l'effet, tout de suite, de personnages d'Edgar poe; et pourtant il y avait en eux

---

18) Pléiade I, p. 727

un charme, un charme malheureux; je me les représentai comme des victimes de la fatalité. L'homme était très grand et maigre, un peu voûté, avec des cheveux tout blancs, trop blancs pour sa physionomie jeune encore; et il avait dans son allure et dans sa personne quelque chose de grave, cette tenue austère que gardent les protestants. La fille, âgée peut-être de vingt-quatre ou vingt-cinq ans, était petite, fort maigre aussi, fort pâle, avec un air las, fatigué, accablé. (...) Elle était assez jolie, cette enfant, d'une beauté diaphane d'apparition; (...)

Ils se trouvèrent en face de moi, de l'autre côté de la table; et je remarquai immédiatement que le père avait un tic nerveux fort singulier.

Chaque fois qu'il voulait atteindre un objet, sa main décrivait un crochet rapide, une sorte de zigzag affolé, avant de parvenir à toucher ce qu'elle cherchait.[19] (*Le tic*)

《Il s'en allait mourant》《ses longues jambes, si maigres qu'elles semblaient deux os》《tout son pauvre corps expirant》, 《comme des victimes de la fatalité》《des cheveux trop blancs pour sa physionomie jeune encore》《d'une beauté diaphane d'apparition》といった表現から容易にわかるように，いずれの人物も常人とは掛け離れた風体で，死と親しいというべきか，極めて近くにある。特に後者では，「わたし」がエドガー・ポーの作中人物の印象を持つほどに異様で，異常な体験をしたことが一目でわかるような人物である。彼らが語り手として恐怖の物語を語るのはいかにもふさわしく，適役だといえようか。ここにはモーパッサンの枠組みを持つ短編の，枠組みの機能のひとつの典型的な例がみられる。つまり，語り手が紹介され，語り手の物語のテーマが

---

19) *Maupassant Contes et nouvelles, tome II*, Bibliothèque de la Pléiade, 1979. p. 187. 以下 Pléiade IIと略

あらかじめ明確にされる。「わたし」が語り手を紹介する冒頭場面の背景は，*Auprès d'un mort* では南仏 Menton, *Le tic* では Auvergne 地方の温泉湯治場 Châtelguyon であり，いずれも静かでおだやかな場所であるので，このようなところでは先のような人物はいやでも目につくであろうし，《Une vague curiosité m'attira vers lui.[20]》となるのも自然なところであろう。

物語は，*Auprès d'un mort* では語り手が，自分の先生であるショーペンハウエルの亡くなった日のお通夜の時，死んだはずのショーペンハウエルが動いたように見え，近づいてみると，先程まで笑っているような顔だったのがしかめ面になっているので，生きているのではないかという恐怖を味わうものであり，*Le tic* では亡くなった（と思った）娘を墓に埋葬した夜，帰ってきた娘を見て幽霊だと思う話である。この２作がいわゆるツルゲーネフ流であるというのは，すぐに合理的解決がなされているからである。すなわちショーペンハウエルが動いたように見えたのは，腐敗が進んで筋肉がゆるみ口から入れ歯が落ちたためであり，また顔は当然しかめ面になる。また，幽霊だと思った娘は実は死んだのではなく仮死状態にあっただけなのである。特に *Le tic* では，語り手は物語に入る前にあらかじめ種明かしをしてしまっている：

Ah ! vous faites allusion au spasme de ma main chaque fois que je veux prendre quelque chose ? Cela provient d'une émotion terrible que j'ai eue. Figurez-vous que cette enfant a été enterrée vivante ![21]

したがってこのふたつの物語を幻想小説と呼ぶことはできないのは勿論であるが，しかしそれでもなお，語り手が物語るにつれて語り手が味わう恐怖感，あえていえば幻想的な恐怖感を読者である我々もおなじように感じられるところが先のツルゲーネフのものとは異なる点であろう。この

20） Pléiade I, p. 727

21） Pléiade II, p. 189

恐怖感は何から由来しているのだろうか。何よりも雰囲気の醸成の巧みなことが挙げられる。*Auprès d'un mort* では，語り手が物語にはいる前に生前のショーペンハウエルの印象を簡潔に述べている：

Il me parla de lui (= Schopenhauer), il me raconta l'impression presque surnaturelle que faisait cet être étrange à tous ceux qui l'approchaient.[22)]

また次のような，フランスの政治家がショーペンハウエルと会見した後に言った言葉も紹介している：

《J (= un politicien français)' ai cru passer une heure avec le diable.》[23)]

ここですでに l'impression presque surnaturelle とか le diable と言った表現が見られることに注目しておこう。さらに物語にはいってから，亡くなったショーペンハウエルの遺体のそばでの印象をこのように語る：

La figure n'était pont changée. Elle riait. Ce pli que nous connaissions si bien se creusait au coin des lèvres, et il nous semblait qu'il allait ouvrir les yeux, remuer, parler. Sa pensée ou plutôt ses pensées nous enveloppaient; nous nous sentions plus que jamais dans l'atmosphère de son génie, envahis, possédés par lui. Sa domination nous semblait même plus souveraine maintenant qu'il était mort. Un mystère se mêlait à la puissance de cet incomparable esprit.

Le corps de ces hommes-là disparaît, mais ils restent, eux; et dans la nuit qui suit l'arrêt de leur cœur, je vous assure, monsieur, qu'ils sont effrayants. (...)

《Il me semble qu'il va parler》, dit mon camarade. Et nous regardions, avec une inquiétude touchant à la peur, le visage

---

22) Pléiade I, p. 728

23) *ibid.*

immobile et riant toujours.[24)]

しばらくすると語り手は気分が悪くなり，また遺体から悪臭がするので，隣の部屋へ扉を開けたままにして行くことにする：

Mais il nous obsédait toujours; on eût dit que son être immatériel, dégagé, libre, tout-puissant et dominateur, rôdait autour de nous. Et parfois aussi l'odeur infâme du corps décomposé nous arrivait, nous pénétrait, écœurante et vague.

もともと短編小説にあっては，印象の統一が重要不可欠な要素であることは幾多の批評家が指摘しているところであり，またモーパッサンがその重要性を十分に認識していて，この点に関しても彼の作品には間然する所がないことは過去何度も指摘してきた。先の引用が語り手の語る物語に異様な雰囲気，恐怖感を醸しだすべくその機能を十全に発揮しているのがよく分かると思うが，ツヴェタン・トドロフは幻想テキストの構造的統一の実現をよく示す，いずれも比喩に関するものだがその3つの特性を，第一は誇張，第二に比喩表現の本議的な意味の現実化をあげ，そして「一連の比較，比喩表現，ないしは単にイディオム的な表現で，共通言語ではごく日常的におこなわれているけれど，かりにこれを文字通りにとるとすれば，超自然的なできごと（それは，まさしく物語の最後で起こるできごとなのである）を指示することになるような表現[26)]」を導くきまり文句，すなわち《on dirait》，《on eût dit》，《comme si》といった表現が多用されることを挙げている。「このような例が枚挙にいとまなく，また，すこぶる多様であることからしても，これが単なる個人的文体の問題ではなく，幻想ジャンルの構造そのものに結びついた特性であることは明白であ

24） *ibid.*, p. 729

25） *ibid.*, p. 730

26） Tzvetan Todorov: *Introduction à la littétature fantastique.* 邦訳『幻想文学　構造と機能』渡辺明正，三好郁郎訳（朝日出版社，1975年）p. 123

ろう。[27]」とまで言い切っているが，上の引用にも《on eût dit que...》や，《il nous semblait que ...》《Sa domination nous semblait même...》《il me semble que...》など類似の表現，あるいは《Nous nous sentions (...) envahis, possédés par lui》といった言い回しが見られることに注目したい。(ほかにも《comme devant une apparition》[28]といった表現が見られる) つまり作者モーパッサンはこの作品で幻想小説的技巧のひとつを用いているとも言えようか。トドロフが言うように，幻想物語ではこうした言い回しで表現されたことが物語の最後で実現するのであるが，*Auprès d'un mort* では結局起こらない。この点からいっても幻想小説とは言えないのであるが，上記のような雰囲気の醸成がなされたあと：

Tout à coup, un frisson nous passa dans les os: un bruit, un petit bruit était venu de la chambre du mort. Nos regards furent aussitôt sur lui, et nous vîmes, oui, monsieur, nous vîmes parfaitement, l'un et l'autre, quelque chose de blanc courir sur le lit, tomber à terre sur le tapis, et disparaître sous un fauteuil.[29]

という状況に陥れば，語り手が黄泉の国からショーペンハウエルが蘇ってきたのだと信じるのは極めて自然であり，また当然な反応であろう。

Le tic では，先に述べたように前もって種明かしをしているためにか，上述のような表現は，入口の大きな鐘が館に響いた時《comme dans un caveau》[30]があるだけである。そして語り手は《devant ce spectre》《L'apparition reprit》と断定している。したがって語り手が娘の死をなんの疑念もはさむ余地なく確信する状況設定がなされるべきであり，実際なされている。すなわち，娘は重い心臓病を患っており，語り手は万一のことを覚悟している。ある日のこと，娘は庭で倒れて死んだように冷た

---

27) *ibid.*, p. 126

28) Pléiade I, p. 730

29) *ibid.*

30) Pléiade II, p. 190

くなって運び込まれる：

Le médecin constata le décès. Je veillai près d'elle un jour et deux nuits; je la mis moi-même dans le cercueil, que j'accompagnai jusqu'au cimetière où il fut déposé dans notre caveau de famille.[31)]

語り手は娘の死を十分に確認，納得しているのである。

トドロフは，「≪物語る≫一人称とは，読者の作中人物に対する同一化を，もっとも容易ならしめるものである。言うまでもなく，≪わたし≫という代名詞が万人に共通のものだからだ。この同一化をなお一層容易ならしめるべく，語り手は，すべての（ほとんどすべての）読者がそこに自分を認めうるような，≪月並な人間≫に設定されるであろう。[32)]」と述べている。語り手は最初に引用したように，外見は月並みな人間とは言い難いのであるが，その語り口はオーソドックスで，最愛の娘を亡くし（たと思い），埋葬し終えて家に帰った時の心情の吐露や振る舞いは読者も十分に納得，同情しうるものであろう。

III

はたして幻想物語なのかそれともそうではないのか，きわめて微妙に見える作品が *Lui?* である。と言うのは，語り手が合理的解釈を下しているかにみえるからである。以下にこの作品をすこし詳しくみてみよう。物語は冒頭から一人称で語られる。「わたし」は結婚しようとしている男なのだが，この男の結婚感は：

Je considère l'accouplement légal comme une bêtise. Je suis certain que huit maris sur dix sont cocus. Et ils ne méritent pas moins pour avoir eu l'imbécillité d'enchaîner leur vie, de renoncer à l'amour libre, la seule chose gaie et bonne au monde,

---

31） *ibid.*, p. 189

32） Tzvetan Todorov: *op. cit.*, p. 130

de couper l'aile à la fantaisie qui nous pousse sans cesse à toutes les femmes, etc., etc. Plus que jamais je me sens incapable d'aimer une femme parce que j'aimerai toujours trop toutes les autres. Je voudrais avoir mille bras, mille lèvres et mille... tempéraments pour pouvoir étreindre en même temps une armée de ces êtres charmants et sans importance.[33)]

というように，この男にとって結婚など本来ならとんでもないことなのである。それなら何故結婚するのかといえば，夜ひとりで家にいたくないという理由のためにである：

Je me marie pour n'être pas seul ! (...)

Je ne veux plus être seul, la nuit.[34)]

そして，この追い詰められた気持ちに陥るきっかけとなった出来事を物語り始めるのだが，ある秋の鬱陶しい夜のこと，語り手はどうにも淋しくてやりきれなくなり，友人に会おうと外へ出て行くが結局誰にも会えず，真夜中に家に帰ってくる。：

J'errai longtemps ainsi, et vers minuit, je me mis en route pour rentrer chez moi. J'étais fort calme, mais fort las. Mon concierge, qui se couche avant onze heures, m'ouvrit tout de suite, contrairement à son habitude; et je pensai: 《Tiens, un autre locataire vient sans doute de remonter.》

Quand je sors de chez moi, je donne toujours à ma porte deux tours de clef. Je la trouvai simplement tirée, et cela me frappa. Je supposai qu'on m'avait monté des lettres dans la soirée.[35)]

部屋に入ってろうそくに火をつけようとした時，だれかが自分の肘掛け椅子に座っているのに気付く：

---

33) Pléiade I, p. 869

34) *ibid.*, p. 870

35) *ibid.*, p. 872

Je n'eus pas peur, oh ! non, pas le moins de monde. Une supposition très vraisemblable me traversa l'esprit; celle qu'un de mes amis était venu pour me voir. La concierge, prévenue par moi à ma sortie, avait dit que j'allais rentrer, avait prêté sa clef. Et toutes les circonstances de mon retour, en une seconde, me revinrent à la pensée: le cordon tiré tout de suite, ma porte seulement poussée.[36)]

その友達は眠っているようだったので，肩にさわるつもりで手を差し出すが：

Je rencontrai le bois du siège ! Il n'y avait plus personne. Le fauteuil était vide ![37)]

最初の方で述べたように，幻想 le fantastique の定義は論者によって一定していないのであるが，それでも共通する部分があることはあるのである。それは：

C (= le fantastique)'est un produit de rupture, une déchirure soudaine dans l'expérience vécue du quotidien.[38)]

という点である。*lui*？ に戻れば，正に日常生活の裂け目が表出したかのようである。しかし，冷静な人間である語り手はすぐに理性を取り戻し，合理的な結論を下す：

J'avais eu une hallucination—c'était là un fait incontestable. Or, mon esprit était demeuré tout le temps lucide, fonctionnant régulièrement et logiquement. Il n'y avait donc aucun trouble du côté du cerveau. Les yeux seuls s'étaient trompés, avaient trompé ma pensée. Les yeux avaient eu une vision, une de ces

---

36) *ibid.*

37) *ibid.*, p. 873

38) Marcel Schneider: *Histoire de la littérature fantastique en France*, Fayard, 1985. p. 8

visions qui font croire aux miracles les gens naïfs. C'était là un accident nerveux de l'appareil optique, rien de plus, un peu de congestion peut-être.[39]

しかし：

J'allumai ma bougie. Je m'aperçus, en me baissant vers le feu, que je tremblais, et je me relevai d'une secousse, comme si on m'eût touché par derrière.

Je n'étais point tranquille assurément.[40]

とあるように，自分の下した合理的な結論を心の底から納得しているわけではない。信じたくとも信じきれないのである。（comme si が用いられることも注意しておこう）ツヴェタン・トドロフは「確かにわれわれのものである世界，悪魔も空気の精も吸血鬼もおらず，われわれのよく知っている世界，そうした世界でひとつのできごとが起こる。ところでこのできごとは，馴れ親しんだ当の世界の法則では説明不能なのである。そのようなできごとを知った者は，考えられるふたつの解釈のいずれか一方を選ぶほかない。すなわち，すべて五感の迷妄にして想像力の産物であるとしてしまえば，世界の法則は手つかずに残る。さもなければ，そのできごとが本当に起こったのであって，現実の一部をなしていると考えるほかないのであるが，そうすると，この現実がわれわれの識らない法則に支配されていることになろう。悪魔とは幻覚であり，空想の存在であるのか。それとも，悪魔もやはり，他の生きものとまったく同じで，現実に存在するのだが，ただめったに出くわさないだけであるのか。

幻想とは，こうした不決断の時間を占めているもののことである。（…）幻想とは，自然の法則しか識らぬ者が，超自然的様相をもったできごとに直面して感じるためらいのことである。[41]」と述べているが（始めの

39） Pléiade I, p. 873

40） *ibid.*

41） Tzvetan Todorov: *op. cit.*, pp. 40～41

ほうで引用したモーパッサンのクロニック *Le fantastique* の《Il (=l'écrivain fantastique) a trouvé des effets terribles en demeurant sur la limite du possible, en jetant les âmes dans l'hésitation, dans l'effarement.》を思い出されたい。), この語り手のありようは正にその状態ではなかろうか：

Depuis ce jour-là j'ai peur tout seul, la nuit. Je la sens là, près de moi, autour de moi, la vision. Elle ne m'est point apparue de nouveau. Oh non ! Et qu'importe, d'ailleurs, puisque je n'y crois pas, puisque je sais que ce n'est rien !

Elle me gêne cependant parce que j'y pense sans cesse. (...)

Il me hante, c'est fou, mais c'est ainsi. Qui, Il ? Je sais bien qu'il n'existe pas, que ce n'est rien ! Il n'existe que dans mon angoisse ! Allons, assez ! ...

Oui, mais j'ai beau me raisonner, me roidir, je ne peux plus rester seul chez moi, parce qu'il est.[42)]

かくしてこの作品は明白に幻想小説と言い得る。

本稿ではモーパッサンのいわゆる幻想物・怪奇物に属するもののうち，幻想（le fantastiqus）には分類されない二作品の幻想的要素を見，また一見微妙に見える一作品の幻想性を見た。次に対象となるのは名実共に幻想小説となるべき作品群である。(à suivre)

（本学助教授）

42） Pléiade I, p. 875